

学会発表渡航支援報告書

(ふりがな) 氏 名	さかなし けんた	所属・職名
	坂梨 健太	京都大学大学院農学研究科生物資源経済学専攻・博士後期課程
e-mail	mokkosu81@gmail.com	
発表題名 (英語)	The Use of Hunter-gatherers labor by Farmers in Central Africa – A Case Study of the Relationship Fang and Baka in Southern Cameroon	
著者名	Kenta SAKANASHI	
会議名 (英語)	39 th annual meetings of the Society for Cross-Cultural Research	
開催地(国、市)	Albuquerque, New Mexico, U.S.A	
参加期間	2010年2月17日 ~ 2月20日	
<p>今回参加した学会は、SCCR(Society for Cross-Cultural Research), SASci (Society for Anthropological Sciences), AAACIG (American Anthropological Association Children and Childhood Interest Group) の3学会の合同開催であった。学会間で共同セッションを組むなど、それぞれの学会で共通のテーマを出し議論しあうスタイルは、私自身日本で経験がなく非常に刺激的であった。</p> <p>私は、学会前日にニューメキシコ大学で行われたワークショップ (Recent Research on Congo Basin Hunter-Gatherers and Farmers) でも報告を行った。これは、特に狩猟採集民研究が盛んな日本(京都大学)、フランス (Musée National d'Histoire Naturelle)、アメリカ (Washington State University)の若手研究者が集まってそれぞれの研究成果を発表し、これからの中部熱帯アフリカ研究について議論することを目的とするものであった。おもしろいことに国によってきれいに研究手法・内容が分かれた。フランスの研究は、どちらかというとなり抽象的な議論が多く具体的なデータに乏しかった。アメリカの研究は数人でチームを組んでデータを取り、統計分析等によってこれまでの理論を修正したり、新たな理論の構築を目指す。日本の研究は、これまでの生態人類学の手法をベースに個人が同じ地域で長期に渡って大量のデータを取る。あまり理論的ではなくそのデータを全面に押し出す。議論を通してそれぞれの長短を摺り合わせる事ができたのは非常に良かった。海外の若手研究者とのつながりも拡がり有意義なワークショップとなった。</p> <p>翌日の学会では、日本人研究者で “Diverse Contexts of Congo Basin Hunter-Gatherer Lifestyle and Subsistence” というセッションを組み報告を行った。多くの報告が狩猟採集民の立場に立ったものであるのに対して、私はその狩猟採集民の近隣で暮らす農耕民の視点から、どのような親密な関係を取り結んでいるのかを主に農業労働に焦点を絞って論じた。これまでの研究では、農耕民が狩猟採集民の労働力を容易に、時には抑圧的に利用する者として捉えられてきた。しかし、今日調査地においては、労働力を提供してきた狩猟採集民の農耕化、一方で国家、多国籍企</p>		

学会発表渡航支援報告書

業、都市の富裕層が村へ入り現地労働力を調達し始めていることによって、一部の農耕民は労働力を確保できなくなっている。むしろ、現金収入が容易な狩猟へ経済活動を転換したり、賃労働者として別の農耕民のもとで働いたりして生き延びようとしていることを最新の現地調査に基づいて報告した。また、このような経済格差や生活スタイルといった要因によって、農耕民においても多様な親密圏の存在が現れているにも関わらず、狩猟採集民との対比による一枚岩な農耕民像がつけられてきたことを問うた。会場からは、アフリカ関係の専門家がそんなに参加していないこともあってか、基本的な質問が多かった。ただ、議長、コメンテーターは今日の複雑、多様化する状況の配慮とともに個別具体的な調査研究の重要性を指摘し、われわれ日本人の研究はそれなりの評価を受けたようだった。質疑応答後も特にデータの豊富さを評価するコメントが寄せられた。ただ、データは豊富であるが、それをいかに理論化し海外に通用できるものにするかという点は課題として残る。

最後に私が聴いた限りの学会の様子について述べておく。私は本 GCOE 国際共同研究「移動するマイノリティの生き延びの為の親密圏生成に関する実証的研究」班にも所属しており、その関心に基づいて他の報告に耳を傾けた。全体の傾向としては、家族、教育に関するテーマが多かったように思う。特にアンケート調査等を行い、集計したデータを分析し客観的な結果を導くことに焦点が当たり、私には物足りなく感じた。例えば、学会会場であったニューメキシコ州はメキシコに近く、多くのヒスパニック系の移民がいる。この移民の親による子供への教育についての報告があったが、なぜ移民を対象にする必要があるのか、どのような背景で移民とならざるを得なかったのか、どのように日々生き延びているのかといった情報が十分ではなかった。発表時間の関係やまた学的関心の違いのせいなのかもしれないが、このような背景をわずかでも配慮するとより興味深い研究になると思う。また、その点が見落とされているからこそ、われわれ「移動するマイノリティの生き延びの為の親密圏生成に関する実証的研究」班が掲げる問題意識が有効性を持つのだろう。

